

イスラームの女性観

その理想と現実

塩尻和子

1 クルアーンの理念

イスラーム世界は外からは非常にわかりにくいといわれている。特に、日本人にとってはよくわからない宗教であると思われる。そのよくわからない宗教が、現代のこの情報化の時代にあつて、かつ、イスラームはテロや戦争を擁護するような非常に悪い宗教だというイスラームバッシングがある中で、なぜかイスラーム教徒の数は日に日に増え続けている。イスラーム教徒、ムスリムの総数は十三億人といわれるが、別

の統計によると十六億人という数も報告されている。現在はあと五年から十年以内にキリスト教徒の総数を抜いて世界第一位の宗教勢力になるのではないかという予想も立つ時代となっている。

西洋キリスト教社会から厳しいバッシングを受けながらも、イスラーム教徒が日に日に増えていっているという現状について私どもはどういうふうと考えていったらよいのか。この問題は、じつは緊急を要する大きな課題である。二〇〇五年十二月三日の朝日新聞夕刊に「日本人のイスラーム理解はまだまだ進んでいな

い」という意見記事が出ていた。確かに、現在の世界をグローバルな目で見て、イスラームの人々と親しくしていくことが世界平和に求められる大きな条件ではあるが、イスラーム世界との相互理解を志してみても、実際にはなかなかイスラームの本質について理解できないというもどかしさがある。

本稿では、そのイスラームの中でも特に女性観に焦点をあてて、私たちが一般に目にする、ベールを被り長いドレスを着て家の中に閉じ込められているように見えるイスラームの女性たちの姿が、実際にはどのような姿であるのか、というところを考えてみたい。

一般にイスラームは男尊女卑の思想であると思われるが、イスラームの根本的な聖典「クルアーン」の中では、男女はともに自由で平等であり、ともに正義のために戦うパートナー同士だと教えられている。イスラームは、ユダヤ教、キリスト教の伝統上に発生した宗教で、クルアーンの中にも旧約聖書の記述が多く取り込まれている。原初の間アダムが生まれ、その後そのパートナーとしての女性が創られたといった

記述も旧約聖書の記述とほとんど変わることなく採用されている。しかし、大きな違いがあるのは、旧約聖書が語るような原初の女性、つまりエバに対する非難が見当たらないことである。

旧約聖書ではエバが悪魔の囁きに唆されて知恵の木の実を取って食べ、そして、夫をも誘惑してその木の実を食べさせたことよって、この世界に原罪が入り込んだと記述されている。

したがって、女性は生涯、産みの苦しみ、出産の苦しみをその身体に背負わなければならないという記述がみられる。また、女性はアダムの肋骨の一部から創られたと述べられており、もともと男性に従属するものだという教えが見られるが、クルアーンの中にはこのような教えはまったくみられない。クルアーンの中でも旧約聖書の男女と同じように、やがて人間は罪を犯すが、それは女性が誘惑したからではなく男性も女性も共に悪魔の誘惑に負けて罪を犯し、神から天国を追放されて地上に下ろされる。しかし、地上に下ろされるときに、人間はすべての罪を許されて地上での神

の代理人としての大きな役割を与えられ、子孫を産んで地上で繁栄をしていくようにと教えられている。

このような平等で理想的な男女像を描いているクルアーンの記述に対して、現実にはイスラーム世界では女性蔑視や女性差別的な社会的実情があるのはなぜかという理由としては、預言者ムハンマドが亡くなってから二百年から二百五十年を経て編集された伝承集ハディースの中に、当時の地中海世界や中東世界の伝統的な風習であった女性蔑視的な政策、女性差別的な思想が存分に取り込まれてきたからであると考えられる。

ハディースについては後述するが、預言者ムハンマドの生涯と預言者に付き従って来た第一世代の人たちの記録、言行録である。預言者がどういふときにどのように指示しどのように行なったかという伝承を、預言者の死後、二百年も二百五十年も経ってから集めて編集したものである。

もともとクルアーンには基本的な原理原則が書かれていて、細かな指示はみられない。そのために預言者が亡くなってしまつと、誰も権威をもって指示をする

人がいなくなつてしまい、また同時にイスラーム世界が急速に拡大をしていくと、人々はこれまで考えられなかつたような事態に出会うことになる。そのような状況にあつてハディースをひもとき、この場合には預言者はこう行なつたので、では私たちはこうすればいいのだ、という判断を得ることができる。そのためにハディースは「第二の聖典」として、信仰生活の指針とされるのである。

預言者が亡くなって二百年も経つと、伝承の中に贋作や歪曲などが入ってくるので、ハディースを編纂する過程で正しいと考えられるものだけを集めて六人の編纂者が作った六編のハディース集を真正なハディース集として採用しているが、そのうちの二つが日本語に翻訳されている。プハーリーが編集したハディースと、ムスリムという人が編集したハディースであるが、世界的に見てもハディース集が内容的にほぼ全部、翻訳されて出版されているのは日本だけである。そういう意味では、二編のハディース集の翻訳出版は日本のイスラーム研究の水準の高さを示すものでもある。

クルアーンには「女性は何から創られた」ということは明らかではない。男性に安らぎを与えるためにパートナーとして女性を創ったとしか書かれていない。しかしハディース集では女性はアダムの肋骨の最も曲がったところ、最も曲がりくねった汚い骨から創ったと書かれており、そのために女性はそのように教育してもどのように諭しても、全く役に立たない。矯正しようとするのと折れて、ついには離婚にいたってしまう、といった女性に対する罵詈雑言が記されるようになってきた。

ハディースでは時代の変化の中で女性に人間界の罪の全責任を負わせるという記述がみられるようにもなり、女性は理性と倫理的な責任が欠如した愚かで無知な存在として描かれていくことになったと考えられる。しかし、イスラーム初期の歴史的な事実を検討すると、預言者ムハンマドは自分の身近な女性を人間的に信頼し彼女たちの意見を尊敬して聞いており、差別的な言動は取っていないことが明らかである。

たとえば、預言者が最初に結婚した女性ハディース

ヤは預言者より少し年上で、貿易会社を経営する当時の女社長であった。現在の視点でみても、社会的に活発に活動していた人で、ムハンマドはそのハディースが経営する会社の雇われ人であった。自分の会社の社員であったが、非常に有能で正直であるので、彼女のほうが見初めて求婚したといわれている。

また、預言者は四十歳のときにはじめて神の啓示を受けて神の言葉を受け取るが、その経験が彼にとつては大変恐ろしくブルブル震えて泣きながら妻のハディースのもとへ帰ったと伝えられている。その際ハディースは「あなたしつかりしなさい、これは唯一なる神様からの啓示ですよ。あなたは選ばれたのです」というふうにと夫を励まして最初のイスラーム教徒になったと伝えられている。

また、最後の最愛の妻であるアイシャは、預言者と結婚したときにはまだ十歳になるかならないかの幼な妻であり、預言者が亡くなったときはわずか十八歳であったが、預言者の宗教活動や数多くの宗教戦争の展開の中で、非常によく預言者を助け作戦会議にも自

分の意見を言い、戦場にも一緒について行って大きな働きを成している。

あるとき、男性の信者が預言者ムハンマドに「あなたが信頼する人間は誰ですか」と聞いたら、預言者はすかさず「それはアーイシャだ」と答えたといわれる。そこで男性の信者は大慌てに慌てて「いえいえ、男性の中で信頼する人は誰ですか」というふうに質問を変えたという。そういう逸話も残っているほど預言者自身は自分の身の回りにいる女性たちを信頼して宗教活動や伝道活動を展開していった。

これらの歴史的な事実とは裏腹に、じつはクルアーンの中にも男性が優位だという記述がかなりあり、これに対して預言者自身も自分は女性を大変大切にしているのに、神様の言葉は自分の意思とは違うのだなど嘆いたという話も伝わってきている。ともかく、イスラーム初期の歴史的事実から考えると、当時の状況下では、女性も宗教活動には大きな役割を果たしていたということがみられる。

しかし、九世紀に成立したイスラーム法の中では、

女性は、結婚前は父親が男性親族の保護下にあり、婚姻を機に夫に自分の身体を引き渡し夫に服従することによって扶養権を得て暮らす存在となっていく。イスラーム法による結婚の目的というのは、端的に言えば合法的で正しい夫の子を得てイスラーム社会を存続させていくことである。これについては後述するが、たとえば、現在の医学的な知識ではDNA鑑定をすると九八%ぐらいの高い確率で親子関係を確定することができる。しかし、イスラーム社会では現在でも、処女女性が正しい結婚によって、合法的な手順を踏んだ結婚によって生んだ子供が夫の子供であると考えられている。たとえそのお腹の子供の父親が生物学的に特定されたとしても、合法的な結婚でなければその親子関係は否定されるというイスラーム法の判断が採用されている。

2 イスラーム法

イスラーム法はアラビア語でシャリーアというが「シャリーア」という言葉は最近では週刊誌や新聞等にも

カタカナ表記で書かれることがあり、次第に市民権を得てきている。

イスラーム法とはいわゆる聖法で、別な言い方をすれば戒律、あるいは律法である。この法は人間の行為全般にわたる神の指針であり戒律であるが、その立法の源となるのがクルアーン、スンナ、イジュマー、キヤースの四点である。

「クルアーン」はいわばイスラームの聖書であるが他の宗教と著しくことなる特徴があるのは、一言一句すべて紛れもない神の言葉だと信じられている点である。たとえば、仏教の経典では、お釈迦様の言葉を集めた最初の経典もあり、その後、時代時代によって修行を積んだ高位の出家者や学者たちが作り上げた文章も経典として採用されていっている。

また、キリスト教の聖書も旧約聖書と新約聖書の二種類が正式な聖書として認められているが、どちらの聖書にもほとんどの章で書記が特定されており、たとえば、彼らが神の靈感に従って信仰の中で書き留めたとしても人間の手による製作物であるということは客観

的な事実である。しかし、イスラームの場合はクルアーンの言葉は、預言者ムハンマドを通じて人間にもたらされた神の啓示であり、一言一句紛れもない神の言葉そのものであると考えられている。イスラームの信者でない私たちが「そんなバカな、そんなことがあるものか、それはきつとムハンマドが靈感に導かれたとしても、自分で考えたのではないか」と思ったとしても当然のことであろう。しかしムハンマドの預言者としての伝記等には、自分が意図したことは全くことなる神の言葉が啓示され、ムハンマド自身が右往左往して悩むということも何度かみられる。また、クルアーンは預言者が亡くなって約二十年後という早い時期に結集が行なわれ、外典や偽典などが入り込む余地がなかったということも考え合わせる必要がある。信者でなくても、イスラーム教徒が「クルアーンはすべて神の言葉だ」と信じているのであれば、「そんなバカな、嘘だろう」ということは言わないで、信者の立場を理解して進んでいくことが重要である。

聖典や教義について、「それは嘘だろう」ということ

になると、他の宗教や文化を理解していくことが大変難しくなる。たとえば、「お釈迦様だってあんな優雅な王子様でいらしたのだから、苦行に出るはずなんかない、あんな話はでたらめでしょ」と言えば仏教は成り立ってこないことになる。キリスト教についても「イエスが十字架の上で殺されて三日後に蘇った。そんなはずはありません。バカバカしい」と言えば、キリスト教の信仰は根底から崩れてしまう。

歴史の中で成立し、多くの人たちの心を掴み、精神的な救いをもたらしている宗教思想に対しては、私たちは「そんなバカな」という判断から一歩引いて、それぞれの信者が信じ、そして確信していることを私たちも一つ飲み込んでみるのが重要なことであろう。したがって「クルアーンは永遠なる神の言葉である」ということを信じる・信じないという立場とは全く別に、客観的に扱っていいこうと思っっているわけである。

私が「クルアーンは永遠なる神の言葉で、一言一句紛れもない他ならぬ神の言葉を集めたものである」と説明するのはこのような意味であって、私がそれを信

じているというのではない、ということを理解していただきたい。

イスラーム法の二番目の法源「スンナ」は、前述の預言者ムハンマドと彼に付き従った第一世代の人たちの生前の言行録であるハディース集の中から得られる知識である。たとえばイスラーム教徒は水を使って礼拝前の清めを行なうが、水の全くないところに行つてちょうど礼拝の時間になったらどうするか。そのような時にハディースをひもとくと、砂漠を旅行中に預言者は砂を使って手を清めたという記事が出てくる。そこで「それでは、そうしましょう」ということになってくる。そういう知識のことを、スンナというが、スンナとはアラビア語で「習慣」を意味する。

いまのイラクではスンナ派とシーア派の対立が大変激しくなってきた問題視されているのでスンナという言葉は、どこかで聞いたことのある言葉だと思われる人も多いであろう。イスラーム世界は預言者のスンナを重要視する「スンナ派」が約九〇%の多数派を占めている。シーア派とは、ムハンマドの一番下の娘と結

婚したムハンマドの従兄弟、アリーに従う人々のことを指し、アリーを第一代のイマームとしてその夫婦の間に生まれた子供たちの子孫を歴代のイマーム、救世主として崇拜をしていくことで分派になったものである。シーア派はイスラーム世界で約8%であり、10%に満たない。残りの2%には特にシーア派系の小さな宗派が入っている。シーア派はある意味で少数派であるが、いまのイラン・イスラーム共和国の宗教国教であり国際関係の中では大きなインパクトを持っており、つねにその動向が注目される。

また、現在のイラク問題でもシーア派の動静が重要な解決の鍵となっており、そういう意味で世界的に注目をされる宗派でもあるが、両方とも教義にはさまざまな相違があるものの、スンナ派もシーア派も同じメスクで一緒に礼拝に参加し、一緒にマツカ、つまりメッカ巡礼に出ることもできる。宗派が違うから「お前あっちへ行け、ここに来てはいけない」などということはない。そういう鷹揚な、寛容な側面もあるということを感じておいてほしい。

イスラーム法を作り上げる際の法源の三番目と四番目は、ちよつと面白い項目で、「イジュマー」とはイスラーム教徒、ムスリムの「見解の一致」を指す。本来イスラームには、大本山も教会制度もない。したがってイスラーム世界では誰に一番力があるのか、それは信者一人ひとりである。何かを決めるときに信者一人ひとりに決定権があつて、何事も信者全員の意見の一致をみなければ成立していかない。

預言者ムハンマドがわずか数十人の信者で出発したときは、信者の全員一致を取るとはそんなに難しいことではなかったが、現在の世界で十六億人にも増えた信者数では、どのようにインターネットや電話が発達しても、全員一致を得ることは不可能である。こういう場合は、それぞれの地域のイスラーム法を専門にするイスラーム法学者たちが意見の一致をみれば、一応それが普及していくことになる。つまり信者の意見の一致、イジュマーは現実には法学者の意見の一致となる。

しかし、いかに法学者の見解が一致しても一般の信

者が最終的にそれを採用しなければ、イスラーム世界で広まっていくことはない。そのような意味でイスラーム世界ではなかなか物事が決まらない、人々が勝手にあれこれ言っばかりで決まらない世界だともいわれることがあるが、やがてそれがコンセンサスを得ていくと、がっちり根を張っていき、いつの間にか何事かが決まっていくといった側面もある。つまり、いつまでも支離滅裂に分裂している社会ではないということであるが、現在のイスラーム世界をみると一人ひとり勝手なことを言っているようにみえるのもやむを得ないかもしれない。

イジユマーについて、現実には法学者の判断の一致が採用されるということを述べたが、四番目の法源「キヤース」も、時代や国、場所、それぞれの状況下において専門の法学者が類推・判断をしていく、その判断のことである。このような判断がなければ、イスラーム教徒は七世紀初頭のアラビア半島と同じような生活をしななければならないということになってしまう。しかし、現在のイスラーム教徒は日本人の私たちとは

とんど変わらない生活をしている。飛行機にも乗るし、車も運転する、インターネットも駆使している。法学者による時代や状況に即した類推・判断がなければ、こんにち彼らはまるでアメリカにいるアーミッシュの人たちみたいに、何世紀も前の時代と同じような生活をしなければならぬということになってしまう。たしかにイスラーム法は厳格な道德規範であるが、これら四点、もちろん、クルアーンが最も重要であることは言うまでもないが、これらの四点を法の源として制定される「不文法」であることによつて、時代に即した判断が可能となるのである。

イスラーム法、シャリーアは神が決めた法であり、その原理や原則を改変することは不可能である。しかし、成文法ではなく不文法であり、上述のように自由な判断が相当程度許されている戒律でもある。たとえば、日本の法律は、現在日本では憲法改正という声が大きくなっているので、いまなら憲法をあげたほうがわかりやすいかもしれないが、第一条第一項何々といったように、文章で書かれている。ほとんどの場合の

法律は文字で書かれているが、不文法というのは文章がない、つまり書かれていないものである。

それでは、現在のイスラーム教徒は何を基準にして暮らしているのか、特にイスラーム法学者はなにをもとにして法判断をするかということが問題となる。法学者は、上記の四つの源は言うまでもなく、九世紀初頭から現在までの膨大な法律研究書や法判断の判例集等を点検して、同時に現在の時代の要求に合わせながら判断をしていく。

たとえば、いまイスラーム世界で大きな問題になっている脳死についてみれば、サウジアラビアでは脳死による臓器移植が認められている。サウジアラビアのような強硬な保守派の国で、イスラーム法をこんにちでも国家の法として採用している国で、脳死が認められているというのは大変面白いことであるが、イスラーム法に則して脳死は現代では採用してもいいのではないかということ、サウジアラビアの法学者が判断をしたわけである。

ところが、これはまだイスラーム世界のコンセンサ

スになっておらず、たとえば、エジプトでは心臓死による移植は採用されているが脳死に対してはまだ大きな抵抗があつて、法学者が正式に採用するという発表をしていない。

したがって、イスラーム法においては、それぞれの土地や地域、状況下によっていろいろな判断がなされるが、法が成文法ではないために新しい判断の可能性が残されていることになる。つまりシャリーアは成文法ではなく法学者が原理に則つて個々の事例を判定する不文法なのである。

このようなシャリーアの基本的な理念は「人間とは何か」という教義に基づいている。イスラームの人間観については稿を改めたいが、イスラームの中には基本的に生物学的、あるいは自然な人間観がみられる。たとえば、宗教的に神に最も喜ばれる人間の生き方は世間を外れて出家したり、修道院に入つたり、一生独身で過ごしたりすることではなく、世間の只中で日常生活を普通に行ないながら伴侶を得て結婚をし、子供を生み育て、そして、次の世代を世の中に送り出して

年老いて一生を終わるといふ生き方である。つまり人間として、生物学的にも社会的にも、当たり前前の普通の自然な生き方が神にとって最も喜ばれる生き方であると考えられている。したがってイスラームには出家思想はみられない、在家の宗教ということになる。

日本人の中にはイスラーム神秘主義思想に関心をもっている人も多いが、神秘主義の修行者スーフィーたちはどうなのか、という疑問が生じるであろう。スーフィーたちも結婚をして家庭を持ち、その家庭や子供たちの生活を確保してそれと同時に自らはモスクに籠こもったり、家に籠こもったり、道場に行ったりして修行するということが薦められている。隠遁生活を一生行なつて家族を路頭に迷わせたりすることは神には喜ばれないことである。

前述のイスラーム法学者たちも同様である。現在では各地の大学の法学部にイスラーム法学科という科が設置されており、そこを終了して法学者としての資格を得ることができるようになってきているが、それ以前の、たとえば、ほんの三、四十年ぐらい前までは、横町の

おじさんで普段から非常によく宗教を勉強している人のように、あの人に聞きに行けば何でも教えてくれるという人が法学者という役目を担うことになっていた。イスラーム世界では、神秘主義者や法学者・神学者などが職業として成立していたということは、ほとんどの場合はみられなかったのである。

学者の中には、ごく少数の人が、国家の裁判官として働き、王朝に仕えたり国王に仕えたりすることがあり、そういう人には職業としての法学者という地位もあつた。しかし、一般的には非常に物知りであつて、信仰心も大変優れているという人たちが、金曜日にもスクでいるいる人の相談を受けるといふ場合が多い。法学者という役割を担いながら自分の生業、経済的な活動には別の仕事を持っているといふわけである。

前述のハディース学者のブハーリーも、大変有名なハディース学者であるが彼は小間物を商う行人として生計を立て、金曜日にはモスクで弟子たちの指導をする、そういう生活をしていたようである。

イスラーム法が「人間とは何か」といふ観点に基づ

いているということは、イスラーム法が関わる人間の行為についてもみることができる。法が対象とする行為は、義務行為、推奨（勸告）行為、許容行為、自粛（嫌悪）行為、禁止行為の五種に分かれるが、実は人間の行為はこの五つの分類の中にすべて入ってしまうのである。最も多いのが「許容される行為」、つまり中立の行為で良いも悪いも価値判断のない行為である。一般に法律が適用されるのは「義務の行為」と「禁止の行為」だけであり、義務の行為は行なわないと罰金、あるいは逮捕されることもある。「禁止の行為」を行なったらこれも罰金を課せられたり逮捕されたりして、一定の刑罰を受ける。

しかし「したほうがいい」という推奨行為や「できればしないほうがいい」という自粛行為等は、一般の法律の対象にはならない。ところが、イスラーム法は神による宗教法であり、人間が行なうあらゆる行為に関して法判断が適用される。刑法や実定法の対象とはならない推奨行為や自粛行為にも来世的な褒賞が備えられていると教えられる。そういった意味で一般の法律と

「神の法」との違いがここに見られるということになる。この法の執行においては、九世紀の中ごろまでに成立した四つの法学派がある。シャリーアは、ハナフィー派、マリック派、シャーフイー派、ハンバル派という四法学派の学説を固定して、遵守する体制を現在まで取っている。したがってイスラーム法の自由判断の門は閉ざされていると言われることもある。イスラームの歴史を学ぶ際に、十世紀ぐらいに法判断の門が閉ざされてしまった、と教えられる。そのためにイスラームは非常に後進的で進歩がないというふうに受け取られることもある。

もしその十世紀ぐらいで法判断が完全に閉じられてしまったら、現代ではイスラーム教徒は飛行機には乗れないし車も運転できないことになる。しかし、実際には不文法であるシャリーアは時代や状況の変化に合わせて柔軟に運用されている。たとえばサウジアラビアのある王子がスペースシャトルに乗って宇宙へ行っただこともあるくらいである。そういった判断は現在でもその時代の要求や、それぞれの地域、また、人々の

要求に応じて柔軟に対応しているということが理解できる。

矛盾した言い方もしれないがイスラームの法判断というのは伝統に非常に忠実で、非常に厳格であるという一つの側面と、それと同時に時代の要求に合わせて柔軟に変化していくことができるという別の側面をもっている。この二つの側面、あるいは原理というものが矛盾なく行なわれてきたために、千四百年間のイスラームの歴史が展開をしいったのである。

イスラーム法シャリーアは、宗教的な儀礼のみならず日常生活、社会生活、経済活動、政治や国際関係、あるいは、国際法上の問題や戦争の規定に至るまで、人間活動の全体に深く関わっている戒律である。したがって政教一致的な社会が理想とされるということになる。繰り返しになるが、現在でもサウジアラビアやスーダン等、宗教的保守派の国は、このイスラーム法を国家の法として採用している。他のイスラーム教国はほとんどすべてが近代的な市民法、私どもが日本で行なっているのと同じような憲法や家族法、民法や刑

法といったものを敷いているが、社会的な日常生活にはこのイスラーム法が大きな力を持っている。特に、結婚、離婚、子弟の養育、遺産相続等の家族法の分野では、ほとんどすべてのイスラーム教徒がシャリーアに従って生活をしている。

そういう意味で、政教一致的な社会が理想とされるということでは、やはりイスラーム社会は遅れていると思われるかもしれない。しかし、ヨーロッパの近代市民社会を振り返ってみると、キリスト教の世界で政教分離が謳われたのは、政治と宗教的理念を分離しろということでは決してなく、政治権力と教会権力を分離するということであつた。それまでのヨーロッパ中世ではローマ教皇の力が大変強く、また神聖ローマ皇帝などといったような地位もあり、教会権力が政治の分野に大きな発言権を持ち、国王や皇帝の罷免権まで握っていたからである。

そのような社会に対して、教会の権力と政治の権力を分離してしまおうというのが近代的な政教分離である。この近代的な政教分離を継承しているヨーロッパ

の国々も、アメリカ合衆国も、決して政治と宗教理念を分離してはいない。たとえばアメリカでは大統領が宣誓するときに、聖書に手を置いて誓いを行なう。ブッシュの政治的立場からもよくわかることであるが、宗教学者の間では「アメリカこそ現在の世界で最も巨大な宗教国家だ」とみなされている。

どの社会でも、私たちの日本の社会であつても、伝統的な文化や宗教の理念、あるいは、宗教思想から全く無縁な社会はこの地球上のどこにもないと言つてもよいであろう。そういうふうと考えていくと、政治も宗教も、その理想的な側面は一致しているのが当然だと考えるイスラームの考え方は、ある意味で非常に正直な感情であり、現実の社会を正面からみているように思われる。イスラーム社会には、後進的であれ進歩的であれ、宗教理念を重要視していくという態度の表明があるようにみられる。

3 イスラーム法と女性

現在のイスラーム世界でもイスラーム法シャリーア

はイスラーム教徒の、特に家庭に関わる規律の中で大きな力を持つている。最近では日本人でイスラームに改宗する人も目につくようになったが、その人が家庭の中でただ一人のイスラーム教徒となり、あるいは、職場でただ一人イスラーム教徒であつたとしても、その人は自分が結婚するとき、離婚するとき、子供を育てるとき、財産分与をするとき、すべてイスラーム法に則つて行なわなければならないことになる。どのような世界の端にいようと、ほかにイスラーム教徒がない地域で暮らそうとも、イスラーム教徒になつた人々にとつては、シャリーアは重要な規範であり、神から与えられた戒律なのである。

結婚や離婚、子弟の養育、遺産相続などの家庭内の問題は、現実には男性よりも女性に大きく関わる規律である。この規律は結婚するときや離婚するとき、子供を育てるときなどのさまざまな側面に及び、女性に対する厳格な規範となる。

そういう意味では、イスラーム法は女性の一生に変深く関わっている。一般にイスラーム世界では結婚

前の女性に対する性道徳は異常なほど厳しい。たとえば、ベール、袖やスカート丈の長い衣服などは、イスラーム女性の象徴とも言えるが、特にこんにち、世界的に宗教復興運動が高まってくると、ほとんどのイスラーム教徒の女性はイスラームに入信するや否やただちにスカートを巻いてお化粧も落として現れてくる。

実際にはベールを被つても、お化粧をしている女性には中東世界にはたくさんおり、衣服も色や形に意匠をこらしてきれいに装っているが、遠い日本などで宗教に目覚めた人たちはとりわけ教条主義的になり、なかには非常に熱狂的な信者になって、たちまちイスラーム的な服装をし、イスラーム的な生活を守ろうとする場合が多いようである。そのために、現在の世界では女性がベールをしているか、していないかというのがイスラーム教徒であるかないかを見分ける大きなポイントになってきている。

このような現象から考えると、女性のベールに代表される衣服の厳格な規定は、クルアーンの中に非常に多く繰り返し出てくるのではないかと思われるのである。

う。ベールや長い衣というのは、女性が身を慎み貞節を守るために着用することが神によって命じられていると一般には信じられているが、クルアーンの中にはたつた一箇所しかベールに関する記述は出てこない。

「信者の女たちに言うがよい、視線を低くして貞潔を守れと。外に表われ出るものその他には、彼女たちの美しさや飾りを目立たせてはならない、そして、ベールをその胸の上につけなさい」(クルアーン二十四章三十一節)という記述のみである。つまり、自然に外にもれ出るものその他には意図的に女性の美しさや飾りを目立たせてはならない、という規範である。「ベールをその胸の上につけなさい」という記述についても、どのようにベールをつければいいのかという具体的な方法についてはクルアーンにはなにも指示がない。

このような表現は他の宗教にもたくさんあるが、現代、宗教の規範を文字通り実行するという人たちは少数派であろう。したがって、これらの記述はむしろ精神的な規範として把握されるべきであり、言い換えればベールというのは女性の貞節に対する決意と心の守

りを表わすものではないかと思われる。

しかし、文字通りそれを身につけなければ正しいイスラーム教徒ではないといったような時代の風潮が見られるようになると、女性に対してさらに厳格にベールやイスラーム風の衣服の着方を強制してくるようになる。現在のイスラーム世界は、恐らくイスラームが発祥してから千四百年の歴史の中で、最も厳格な規範遵守が要求される時代になっているように思われる。

このようなベールや黒いマントなどを被り身体の線を隠してしまうということは、女性が自らの貞節を守るためのものではなくて、本来は男性のほうが女性の姿を見て誘惑されないように、つまり、実際には男性を守る方針の一つとして採用されたものであろう。しかし、このような規定が長い歴史の経過のうちに、それぞれの社会の伝統や風習と結びついて、本来イスラームとは全く関係のない文脈の中で展開をし、また重複してさらに厳しくなり、女性を苦しめる要因ともなってきた。

たとえば「名誉のための殺人」のように、イスラーム

ム法の規定とそれぞれの地域の習俗や因習とが結びついて、本来はクルアーンの教えではなかったものが神の命令として導入され、女性を抑圧する要因となっている例がいくつみられる。

「名誉のための殺人」は、イスラーム世界の厳格な性道徳と結びついている。クルアーンの中には貞節や純潔は男性にも女性にも共に等しく守らなければならない命令として書かれているが、現実には男性よりも女性に厳しく適用される。特に婚前の若い娘の純潔については、周囲から厳しく鵜の目鷹の目で注視されている。

たとえば、ある家でお嬢さんの婚約が決まったとする。あるとき何らかの用事で外出をしているときに、他の人から、よその男に色目を使ったとか、あるいは仕事の関係で別の男性と話さなければいけないことがあったとしても、それを誰かが「あんたとこのお嬢さんは誰々と婚約しているのに、別の男性とデートしていたよ」といった噂話にして親に言いつけたりするならば、その真偽を確かめる前に親は家族の名誉を守るた

めに、父親やあるいは兄弟や男性の従兄弟たちが集まってきてその娘を殺してしまふということがある。これが「名譽のための殺人」と呼ばれる事件であるが、このような事例は現在でもよくみられる。

パキスタンでは年間三百人以上の女性が「名譽のための殺人」の被害に遭っていると言われている。二十年か三十年近くも前のことになるが、サウジアラビアの傍系王族のある王女が若い男性と許されざる恋に落ち、その結果、二人とも捕まって公開処刑になった事件があった。王女の死、*The Death of a Princess* という題で映画にもなったが、これはたまたまイギリスのBBCの記者がその公開処刑の現場に遭遇し小さなカメラで撮影をし、それを持って帰って記事にして、その記事をもとにして映画がつくられたわけである。物語は、二十歳を出たか出ないかの若いプリンセスが、自分の父親と同じぐらいの年配の、やはり王族の一人の第二夫人となってしまうところから始まる。結婚生活で辛せを感じられない彼女はあるとき別荘で仕えていた若い男性と恋仲になってしまう。これはまさに不倫の恋

であり姦通罪が成立する。姦通罪には死刑に等しい重い刑罰が待っているのでプリンセスは男装して逃げようとしたが空港で見つかって捕らえられた。二人は公開処刑場に引き出され、王女は銃殺刑、男性は斬首刑に処せられてしまふ。

また、数年前までアフガニスタンを支配していたタリバーンの支配下で、売春をしていたところを見つかって公開処刑に引きずり出された女性の姿をニュース映像で見たことがある。姦通罪に適用される刑罰は、正式には八十個から百個の石を投げつける、あるいは鞭打ち八十回から百回という刑罰である。これは極めて厳しい刑罰でほとんど死刑に近い。もしも女性が妊娠していたなら母子とも死んでしまふということになる。

このような、本来イスラーム、あるいはクルアーンが教えていなかった大変厳しい刑罰が女性の身に降りかかり、現実には女性を抑圧することになる。したがって現在でも若い女性の結婚を巡る悲劇が絶えないことも事実である。

しかし、前述のようにイスラーム法では大変厳しく姦通罪を決めていても、それと同時に女性の生命を守るために、いろいろな抜け道を紹介しているが、女性の妊娠期間についても興味深い話がみられる。女性の妊娠期間は正常であれば実際には約四十週であるが、イスラーム法の規定によると、六カ月から七年間となっている。この規定は九世紀の頃の判断であるので、まさか現在でも効力をもつていようとは誰も想像しないであろう。二年ほど前に私が滞在していたアラブ首長国連邦の新聞の身の上相談のところに、以下のような相談があった。

ある妻が四年間夫から全く触れられなかった、ところが、その妻が最近妊娠していることがわかった。お腹の子供は誰の子と考えたらいいのでしょうか、そういう相談である。これを読めば誰でも「鞭打ち百回かも・・・」と考えてしまうが、回答するイスラーム法学者によれば、イスラーム法では妊娠期間は六カ月から五年になっている。だからまだ四年なので彼女のお腹の子供は正式に結婚した夫の子供である。ただし、

四年間も夫から触れられないということは、夫による虐待に当たるから、女性のほうから離婚を申請しなさい、となる。実際には女性のほうから離婚を申請するのは大変に難しく、また莫大な慰謝料を夫に払わなければいけないが、それでもその法学者は離婚を勧めていた。イスラーム法が認めている女性の妊娠期間六カ月から七年、あるいは五年というのは現在も生きている規定なのである。

なぜそうになっているのかといえば、結婚した若い妻が六カ月から七カ月で子供を産んだとすると、周囲の家族は「これは彼らが婚前交渉をしたんだ、とんでもないことだ」と怒り出すか、花嫁の婚前の不倫を疑うことになりかねない。ところが、妊娠期間は六カ月でも十分であると神の法が決めているうえに、若い夫婦が納得していれば、正式な子供として嫡男・嫡子と認められることになる。

また、夫が長い間単身赴任でいなくても、二年後くらいにお腹に子供ができたとしても、それは正当な夫の子供だと認めることで母親とお腹の中の子供を死な

せないで済む、そういう方策であろう。厳格で非人間的であるといわれているイスラーム法も、女性の生命を守るためには、前述のようにいろいろな抜け道があるのと同時に、たとえば、夫が妻を姦通罪で訴えた場合でも、その訴えが成立するために四人までの成人男性の証人を要求している。姦通、不倫は人目のないところで行なわれるものであり、四人もの成人男性の証人を得ることはまず不可能であろう。しかも、目撃したと証言しながら、それが嘘だった場合には、証人は偽証罪に問われ、その姦通罪は全く成立しないということになる。こうしてできるだけ姦通罪が成立しないように、姦通の疑いをかけられた女性を守るために抜け道が用意されていて、また生まれた母と子が生き延びていくことができるようにというさまざまな場合分けや解釈法が用意されているということにも、私たちは注目していきたい。

しかし、実際にイスラーム法がそれだけ柔軟な対応をしているのに、イスラーム世界の中では、たとえば娘が生まれたら女性器をすぐ切り取ってしまい縫い付

けてしまうという女子割礼(FGM)などの因習が行なわれてきた。つまり、結婚するまで完全に処女を守るために縫合し、そして結婚の前にはそれを切り解いていく、というものであり、残酷な習慣である。非衛生的な手術や感染症のために亡くなる女性や、うまく出産できない女性が多く出てくることになる。このような非常に恐ろしい習慣も、本来イスラームの規範の中にはなかったものが神の法として採用されていき、イスラーム法のもとに実施されてきたのである。

現実にイスラーム世界では、イスラームとは関わらなかつたことがイスラーム法の名の下に採用されることによつて、より一層女性を抑圧し、そして苦しめるといった状況も出てくることになる。しかし、クルアーンの教えでは男女の役割分担が固定的に考えられていることも事実であり、女性の役割はまず生物学的に女であり、妻であり、母であると規定されている。

一般にイスラーム社会は建前では家長制度が色濃く残っている父系社会ではあるが、家庭では母子の絆が大変強いと考えられている。実際に結婚するまでの

女性には非常に多くの規制があるし、もし不倫を疑われたら殺されてしまうという恐怖感もあり、実際に父親の言いなりになって従順に過ごす女性が大変多いが、それは現在でも同じである。しかし、か弱き女性も結婚をして、男の子を産もうものなら大変な勢いで勢力をつけてくる。もともと子供を産むことによって一人前になると考えられている社会であり、母と子の子宮の紐帯という根強い觀念がみられる。現在でも両親を大切にする長幼の序がしっかり守られている社会であり、たとえば、大変なドラ息子であつても父親が入つて来ると必ず立ち上がつて席を譲り、父親の前では絶対にタバコを吸つたりしない。子供たちが父親や両親を立て従つ姿は現在でも変わらずみられる。

たとえば、サウジアラビアではいまのアブダッラー国王は別の母親から生まれているが、それまでのサウジアラビアの国王の兄弟たち七人がステイラー族から来た母親から生まれた「ステイラー七人兄弟」といわれ、同じ母による兄弟が大変な力を持っていた。イスラーム社会は外からみると保守的な父系社会であつて

も、内側では母親を中心にした社会であり、たとえば政府の要人であり、ひげ面で威風堂々とした中年の男性が母親の前では「ママ」と言つて擦り寄り、会つと頬にキスをする、そして、何でも母親の言うことを唯々諾々と聞くという姿がよくみられる。

4 女性の役割

このような一見、保守的にみえるイスラーム社会でも、現在では前述のような非常に因習的な女性虐待、つまり女性が殺されたり女子割礼が行なわれたりする事例などは急速に解消されてきている。特に都市居住者の間ではほとんどみられなくなつてきている。しかも実際にはイスラーム社会は私たちが考える以上に女性の社会参加が多い。

その理由としては、一つには、男女の役割分担がきちんと決められているということである。たとえば、サウジアラビアでは実際に社会の中で男女がはっきり分かれている。男性にとつて中東世界は「女性の顔が見えない、女性がいるのかわからないの世界

だ」ということになる。

そういう意味では女性にこそチャンスが多いということができるかもしれない。とくに私たちのような、イスラーム教徒でない外国の女性はムスリムの男性と一緒にお茶を飲んでもかまわない。女性の部屋に入っ
て一緒におしゃべりすることも自由にできる。つまり私たち女性は、中東社会では広い世界を見ることができ
る。中東研究者はいまだに男性が圧倒的に多いが、中東・イスラーム世界は女性こそが研究者になるべき
社会だ、女性こそが商社の派遣員として派遣されるべき
地域だと、私はつねに考えている。

たとえば、サウジアラビアでは男女が分かれている
ために、女性の世界で働く人が必要になる。医者、学
校の先生、銀行家、証券アナリスト、店員、美容師、
看護師などいろいろな職場で女性が働いている。よく
サウジアラビアでは女性は働いていないといわれるが、
人口の半数は女性であり高学歴の女性を中心に女性の
世界で社会進出を果たしている。海外留学をして帰国
した女性も多く、そういう高学歴の女性は結婚後も仕

事をやめることはない。

逆に私も日本女性は大学を出ても大学院を出ても、
子供をみてくれる人がいなくなったら、やむを得ず家庭
に入ってしまう例が多い。私自身も十六、七年間、母
親と主婦をしてきたので、大学院に入りなおしたのは
三十八歳になってからである。身近で子供をみてくれ
る人がいなければ、どのように勉強したくても仕事に
就きたくても、いまの日本は高学歴の女性を家庭に閉
じ込める構造になっている。「男女雇用機会均等法」の
施行や男女共同参画という政策が取り上げられても、
それらはいわば標語に終わってしまい、実際にその恩
恵に浴することができず女性は、決して多くはない。

ところが、イスラーム世界では高学歴の女性は必ず
と言っていいくらい働き続ける。それは、一つには貧
富の差という問題もあり、ちょうど日本の「おしん」
の時代のように、子守さんとして裕福な家庭に入って、
家事や赤ちゃんの子守を手伝う貧困層の女性がいるか
らでもある。つまり、高学歴の上流階級の女性が社会
進出をするのを助ける低所得層の女性たちがいる。そ

ういう社会の二重構造があるために、どちらの社会においても女性の社会進出は統計に表れる倍から三倍だと思ってもいいかもしれない。こういう貧富の差による社会の二重構造は急速に解決されなければならないが、しかし、イスラーム社会では私たちが思っている以上に女性は活躍をしていることに注目したい。

厳しいシャリーアの規範、地域社会の伝統や習慣、それぞれの家庭の考え方という二重、三重の非常に難しい抑圧の中でありながら、彼女たちが実に生き生きと、そして、元気に社会の中で大きな役割を担っていることも見逃せない事実である。

日本でも先祖供養、ひな祭り、端午の節句などの季節儀礼や通過儀礼、伝統的な食事や行事にしても、それらはほとんどすべて実は主婦によって担われているように、イスラーム世界でも伝統や宗教的規範は、女性の手によって守られているといっても言い過ぎではない。イスラーム的な服装にもみられるように、イスラーム世界の女性の役割は、世界的な宗教復興運動の只中であって、ますます重要になってきているのでは

ないかと思われる。

生物学的な自然な人間のあり方を当然のこととして考えるならば、イスラームの説く女性性という、「産む性」である女性という考え方はより自然な考え方もされない。このようなことを言うフェミニストの友人たちからは非常に叱られるが、いまのところはまだ女性は子供を産む性であり、そういった人間観はある意味で自然な人間観であり、自然な考え方もしれないと思われる。

私ども日本の女性の役割と同時に、イスラーム世界の女性の役割が今後どのように変化をしていくのか、これからの世界の動きとともに注目をしていきたい。

(しおじり かずこ/筑波大学大学院教授)

(本稿は二〇〇五年十二月四日に行われた当研究所主催の公開講演会の内容に加筆いただいたものです。次頁・次々頁の写真は講演会で紹介されたスライド写真の一部です)



エジプト南部の地方都市での婚約パーティーの写真。ここはコプトというエジプト独特のキリスト教徒とイスラーム教徒が共存をして暮らしている街。ベールを被っていない女性はキリスト教徒。



リビアの旧市街の中。



出産のお祝いの籠。産婦に。